

絵本論No. 1

～『はじめてのおつかい』による言葉と場面描写～

小 西 律

Studies on Picture Books No. 1

～Language and Scene Descriptions in “Hajimete no Otsukai”～

Ritu Konishi

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

絵本論No.1

～『はじめてのおつかい』による言葉と場面描写～

Studies on Picture Books No.1

～Language and Scene Descriptions in “Hajimete no Otsukai”～

小 西 律

Ritu Konishi

はじめに

保育・教育の場である保育園、幼稚園、こども園等で絵本の読み聞かせが行われない日はないと言っても過言ではあるまい。その絵本は、絵と言葉（文章）から原則出来ているものであることは言うまでもない。本来対象となる年齢に制限はないが、その用途からほとんどが幼児、つまり子どもの世界で読まれている。なぜ子どもの世界で読まれるのか。端的に言えば乳児期から小学校就学前の幼児期にかけては、人の根幹が形成されると共に人としての証とも言われる言葉獲得の大切な時期に当るからである。子ども達が獲得し話す言葉のほとんどは日常生活中で使用される言葉である。言葉は多様であるが、日常生活で貯えられる言葉には限りがある。

絵本は言葉そのものを文章から知ることが出来、また理解できない言葉であっても描かれている絵が教えてくれる。お話が語られるのみではなく、描かれた絵も語るのである。物語の中に入り込むことで登場人物と一体化し、その心情や行動を自分のものとしてイメージ化するのである。これが、言語獲得あるいは思考を深めることにつながる。絵であるから、当然そこには登場人物の表情、様子、背景等と色彩も大きく関与する。子ども達は視覚で捉える表現描写としての色彩だけではなく、物語の世界に入り込むゆえにイメージーションとしての色彩をもつ。きれいで可愛らしく描かれるから、きれいなのではない。いかに物語の世界に入り込むかにより視覚で捉える表面的なものとは異なる美的世界が広がるのである。言葉もまたしかりである。地域語で記されているものもあるものの、母国語である日本語が正しく使用されているものが基本であり大切である。なぜか。言葉獲得途上にあることを考慮すべきだからである。

本論はこのような点を踏まえ、子ども達によく読まれている絵本の一冊である「『はじめてのおつかい』 筒井頼子作、林 明子 絵」から言葉と場面描写の相互作用を考察するものである。

本論

次の1冊を考察の対象とする。

- ・題名 『はじめてのおつかい』 筒井頼子作 林 明子絵
- ・刊行年 1977年4月 こどものとも傑作集
- ・内容 5歳のみいちゃんがお母さんに頼まれて牛乳を買いに初めてのおつかいに出掛ける話である。

以下場面毎にみていくこととする。

表紙：牛乳を抱えた（手は描かれない）満面の笑顔のみいちゃんが表紙一杯に描かれる。

中表紙：椅子の上に座らせている人形にミルクをやっているみいちゃんが描かれる。

人形の口元に視線は注がれて、顔は真横、体は斜め前方から描かれている。

第1場面：物語の発端である。

あるひ、ママがいました。

「みいちゃん、ひとりで おつかい できるかしら」「ひとりで！」

みいちゃんは、とびあがりました。¹⁾

書き出しから一気におつかいを一人で行くことを頼むという物語の核心が語られる。

母親の表情は生き生きとして笑顔に満ちており明るい。みいちゃんは、母親の目の届く台所で遊んでいる事が分かる。台所は子ども達が日常見慣れた光景そのままに描かれている。細かく見ていくと、ガス台にかけられた鍋とやかんからは湯気が盛んに出て煮たぎっている。流し台に洗い桶につけた食器があり、床には買い物を終えた紙包みが無造作に置かれ、長ネギが立てかけられている。母親の前にあるワゴンには、赤ちゃんの哺乳瓶と、ボールには泡立てたお菓子の生地のようなもの、ふきん、下段にはティッシュペーパーと玉子が置かれている。テーブルにはスプーンの入った皿にコップ、魔法瓶が置いてある。みいちゃんはお絵かきをしていたところを呼ばれ振り向いた斜め後ろ姿で描かれる。横の椅子には中表紙で遊んでいた人形が置かれテーブルの下には絵本がページを開けたまま落ちている。掃除機は出したまま一番手前に描かれている。そして、母親の後方にはベビーサークルに入った赤ちゃんが口を大きくあけて泣いているのが分かる。

この台所の様子は、前述のように子ども達が日常見ている光景であり、格段目新しいものではない。子ども達には、日頃見慣れたありのままの光景であり、違和感なく映った筈である。子どもにとって一人で行くおつかいは飛び上がるくらい衝撃的な出来事である。この場面で母親とみいちゃんのみが描かれるのではなく、日常の1シーンをそのままに映し出しているからこそ子ども達は無理なく話の中に入っていきける要素を含んでいると考える。「あかちゃんのぎゅうにゆうがほしいんだけど、ママ、ちょっといそがしいの。ひとりでかってこられる？」と優しく繰り返し問いかける言葉は「ひとり

で！」のびっくり、不安な気持ちからやってみるに切り替える力を備えていたと言える。これが「みいちゃんならできるからおねがいね」と言われたら、どうであろうか？ できるかな？と疑問形で問いかけている、この疑問形こそが、期待に答え、自信をもたせる契機となる言葉となり「うん！」との返事を返させたと言える。

みいちゃんは斜め後方から描かれ、その表情は不明であるが「うん！みいちゃんいつつだもん」と意志を表明した表情は母親の表情と呼応し明るい笑顔であるとイメージ出来る場所である。こうして、みいちゃんは5歳にして人生初のおつかいに出掛けるのである。

第2場面：

ままと ふたつやくそくをしました。くるまにきをつけることと、おつりをわすれないこと。

みいちゃんは、ままに ひゃくえんだまをふたつ もらって、てに しっかりとにぎりしめ、うちをでました。

2場面の書き出しである。新たな約束事が加わったのが分る。玄関先で見送る母親の表情はおつかいを頼んだ時とはうって変わり、不安気な様子に変わっている一方、みいちゃんは斜め後ろから描かれる。背筋はピンと伸び、左手は開き、右手はお金をぎゅっと握りしめ、前方をしっかりと見、確かな足取りで歩みを進めている。この場面は地の文のみで体言止めも用いた簡潔な3文で構成されている。約束事は前場面で母親の会話文で語られてもよいと考えられるが、そのようにはせず、母親とみいちゃん、それぞれの決意、決断を強く打ち出したと考えられる。

この場面では隣家の垣根、その垣根から顔をのぞかせている犬からみいちゃんの大きさが計れるように描かれている点も見逃せないところである。

第3、4場面

途中で出会った自転車と、ともだちのともちゃんが登場する。「うたをうたいながらいく」みいちゃん。うたは、はじめて経験する一人でのおつかいに対する高揚した、力んだ気持ち、そして自分を勇気付ける意味があったろう。自転車が風を切って通りすぎる様は「びゅーん」と擬音で記し、自転車に乗った人物がどのようなものであるかは記されていない。しかし場面には、しっかりと前方を向きはちまきをしたおにいさんが横向きで描かれる。どのくらい速いかは自転車の車輪の車軸が描かれないところから見てとれる。自転車を横から描いているから、みいちゃんは正面から捉えられている。石の塀に体を「ぺたっ」とこれも擬音で姿を表現することで、みいちゃんの姿がよく分かるようになっていく。視線は自転車に、肩があごにくつつくぐらいいかり肩になり、右手はぎゅっと握りしめ、広げた左手はへいに押し付け、緊張感により硬直した体が塀と一体化したように見える姿で描かれる。

その後、ともちゃんに会う。その時の会話である。

「どこへいくの?」「おつかい……」……「へえ!」「ひとりで?」「うん」「へえ!」

一人でおつかいに行くと知らされたともちゃんの驚きが一言で表現される。どれだけびっくりしたかが「へえ!」としか言えないこの言葉で的確に言い表されている。

また、この場面は俯瞰的に描かれている事でみいちゃんの位置がよく分かるようになっており、大分歩いたように思われているが実は自宅からまだ2軒先にしか進んでいない事が分かる。子どもの足どりも計算された描写となっている。みいちゃんの目の先には辻があり、その先に花屋が描かれる。その先の電柱と一方通行の標識がある辻を左に曲がると店のある坂に出ることが次の場面を見ると分かるようになっている。

第5、6 場面

続く2場面も同じ場所、店の手前の坂道を設定している。母親と公園へ出掛る途中にあるいつもの坂道、この坂を登れば店である。店は右頁場面の右上方に小さく描かれる。ここまで来た安心感から駆け出したとたん転んでしまう。頭だけをかろうじて上げているものの、両手、両膝までが体ごと倒れた姿が描き出される。勢いがついてこけた「すってーん!」、しっかり握りしめていた右手が開きお金が手の中から飛び出した様子は「ころころ」、打ちつけ、すりむいた手、ひざは「じんじん」と擬音を見事に使用し、その状況、心情を表現している。いつもであればいたいと泣いているであろう光景だがおつかいの途中である事をみいちゃんは忘れてはいない。擦りむいた両膝頭が赤く痛そうであるが、すぐさま立ち上がりお金を探す。左場面にこれまでになく大きくみいちゃんが描かれる。右手を握りしめているところから1枚は見つけたことが見てとれる。残りの1枚を目を皿のようにして探しているのである。それを「くるくるくるくる」と表現している。お金は右場面中央の端草のかげに小さく描かれている。

第7～12場面

この6場面は坂上のお店に着き、牛乳を買うまでのみいちゃんを捉える。7場面は坂を少し下った辺りから捉えた店の前に立つみいちゃんの後姿を小さく描いている。店の手前には看板が立っており、ごみ収集、飼い猫探しなど住民に知らせる諸々のものが貼られている。みいちゃんの横には目的の牛乳の入った冷蔵庫も見える。「しんこきゅうをひとつし」で「ぎゅうにゅうください。といいました。うんとおおききなこえをだそうとおもったのですが、ちいさなこえしかでませんでした。」小さな後姿は深呼吸をした姿なのか。意を決したみいちゃんの第一声は店の人には届かず、出てきてはもらえなかったのである。

次の8場面でもっと深く深呼吸して「ぎゅうにゅうください」と口を大きくあけ店の奥に向かい声をはり上げるのだが後ろを通り過ぎる車の音にかき消され、またしても届かない。右手にお金を握り

しめたみいちゃんは左手をついている牛乳の入った3段の小型冷蔵庫より背が低い。続く9場面でもみいちゃんの位置は冷蔵庫の横で変わらない。黒のサングラスをかけたおじさんはタバコを次の10場面で太ったおばさんはみいちゃんを押しつけ前に出てパンを買う。店のおばさんは出て来て対応しているのだが、小さなみいちゃんは見えないこともあり、全く気付かない。パンを求めたおばさんの後ろにいるみいちゃんの何と小さいことか。続く11場面、店のおばさんが奥に入ろうとした後ろ姿に向い、目はおばさん一点に集中して大きく口をあけもっと大きな声で「ぎゅうにゅうくださあい！」と呼ぶように言った声で次12場面でやっとみいちゃんに気付くのである。「しんこきゅうしてぎゅうにゅうください」から「ふかくしんこきゅうをしてぎゅうにゅうくださあい」そして「ぎゅうにゅうくださあい！」と出す声に心情による段階的な変化をつけている。「ぎゅうにゅうくださあい！」と叫んでいるみいちゃんを横から描く。体を前のめりに体全身に力をこめているのがよく分かるように描かれる。まっすぐ下すのではなく少し曲げ握った右手は一段と意思を出し力強く握りしめられやっと届いた言葉に互いの目が出合う。

「むねがどっきんどっきんとなって、めもしばしばおとがしました。」と張詰めていた緊張とそれがとけた心もちを表現しているが、目に音がすると言い、単なる心情表現で終わらせていない。12場面で目が合った二人を横から描く。「まあまあちいさなおきゃくさん。きがつかないでごめんなさい」みいちゃんの顔を優しく見下しながら言い謝るおばさん。それまでの緊張のとれたみいちゃんのみから「ぼろん」と一粒の涙が落ちると記すが、絵はそうではない。言葉には全く書かれない、お金を渡そうとしておばさんを見上げるみいちゃんと牛乳を両手に持って体を屈め笑顔で渡そうとするおばさんを横から描いているのである。緊張がとけたみいちゃんの体全体はゆったりとやわらかく映る。

第13、14場面

13場面は1文である。「てのなかであったかくなかったおかねをわたして」と前場面の説明を入れ牛乳を受け取る。そのあとの「ぱっとかけだしました。」がこの場面で描かれる。牛乳を両手に抱え走り出たみいちゃん。店ではおばさんが体を前のめりにしてなぜか片手を出している。続く14場面で「ちょっと、ちょっとまって!」「はあはあいいながら、おいかけてきた」とあり、おばさんが片手を出した理由が分かるようになっている。おばさんは横から、声をかけられたみいちゃんは斜め前方から顔だけを振り向かせて描かれる。おばさんの追いかけて息をきらせている様子は足の向きと幅、右手を胸に手を当てていることから見てとれる。よく見ると左手の指先には、親指と人指し指で茶色の丸いものを挟んでいる。20円のおつりである。あつけにとられたような顔でみいちゃんは描かれる。牛乳だけに気をとられ約束を忘れていた事が分る。行き帰り、ともに硬貨2枚というのは偶然なのだろうか。

第15場面

13場面のお店から14、15場面と家の並びが分かるように描かれる。斜め後方から坂道を駆け下るみいちゃんの姿がある。背中はずっと左手に牛乳、右手にお金を握りしめ足どりも宙を舞っているように軽やかである。みいちゃんの視線は赤ちゃんを抱いて手を振っている母親を捉えているからである。どんなにか、ほっとしたことだろう。笑顔で駆け下るみいちゃんが十分イメージできるところである。

第16場面

左頁に、おつかいが終わり母と共に帰るみいちゃんの後ろ姿が中央に描かれ、言葉は全くない。みいちゃんと母との会話が聞こえてきそうである。

裏表紙：母親は赤ちゃんに牛乳を、両ひざをばんそこうで手当してもらったみいちゃんは牛乳を飲んでおり、手前には使用した消毒液や包帯が描かれている。

おわりに

40年も前に出版された絵本であるが、現代でもなぜよく読まれているのか。幼児にとって最初のおつかいというものがどういうものであるのか、その見えない心の動きを、変化を言葉と絵が互いに調和し合い見事に描いているからといえよう。例えば、第1場面の細部まで描きこんだ台所の光景は母と子のみ抽出して大きく描写するのではなく、読んでもらっている子ども達の心理を考慮したからと言える。家の中で台所は母親が一番似合う場所であり、子ども達にも母親の存在を身近に感じ安心して居られる場所である。様々な道具や物の中に母親を溶け込ませ、明るい笑顔で話させているのは幼児にとり衝撃的ともいえる外の店へのおつかいだからこそと考える。

このように子どもの心理をよく考慮し言葉もはじめに結論、単刀直入に用件を述べ、あとにその理由を余分な言葉を入れず簡潔に、分かりやすく話すという手法をとっている。はじめは驚いたものの、このくどい説明を加えない簡潔な言葉は容易に5歳児には理解でき、主人公のみいちゃんは親の期待に答えようとすると共にドキドキ冒険にチャレンジする意欲を湧かせることにつながったと考える。年齢を十分考慮に入れた言葉が随所にみられる。子ども達自身が自分だったら、ともちゃんだったらと置き換えて受け止め共感出来るように構成されているのである。事柄を自身のものとして捉え、心情も容易に理解、共感できるという事がこの絵本の最大の魅力である。また擬音による効果もよく考えられている。自転車のベル「ちりんちりん」、驚いた心「どきん」、「びゅーん」と風を切る音、ころんだ「すってーん」、百円玉が転がる「ころころ」、手や足が痛む「じんじん」、百円玉を探しまわる「くるくる　くるくる」、おばさんが奥から店に出てくる「ごとごと　がさがさ」、おばさんがしゃべる「べちゃくちゃ　べちゃくちゃ」、お店のおばさんと目が合う「ぱちん」、胸が鳴る「どつき

んどっきん」、目の音「しばしば」、涙が落ちる「ぽろん」、店のおばさんの息切れの「はあ はあ」、これだけの言葉が使用されるが同じ語句は全くない。これらが文章の中に挿入され絵の描写と相まって見る子ども達に、例えば自転車の場面など臨場感を与えるのである。全体的には短文でありながら、よくイメージできるようになっており、絵もまたしかりである。互いに調和がとれ、よく練られた一冊に仕上がっていると考える。

またほとんどの絵本は第1場面から物語の展開をみるが、この絵本はそうではない。中表紙から物語が始まり話は展開最後の場面につなぐ、それから裏表紙へそして牛乳を買ってくるという目標を達成したみいちゃんの誇らしい満面の笑顔が描かれた表表紙で完結するのである。「絵本は愛の体験である」²⁾と松居 友は言うが、このように時代を超えて読み継がれるような愛の体験をすべての子ども達が受けられる事を望みたい。

引用文献

- 1) 筒井頼子作、林明子絵：はじめてのおつかい3 福音館書店（東京）1977年
以下、本文引用はすべて当絵本による
- 2) 松居 友：わたしの絵本体験83 大和書房（東京）1986年

参考文献

- 1) 森久保仙太郎、偕成社編集部 編集：絵本の世界 偕成社（東京）1988年
- 2) 中村 稔子：子どもの成長と絵本 大和書房（東京）1983年
- 3) 松田 司郎：絵本の国から 五柳書院（東京）1990年
- 4) 中川 李枝子：本・子ども・絵本 大和書房（東京）1982年
- 5) 日本子どもの本研究会編者：子どもと絵本の学校 ほるぷ出版（東京）1988年

